

# 高齢者が働きやすい職場づくり ～産業医と軽労化技術～

産業医科大学人間工学研究室の泉 博之氏に、産業医と軽労化、また現在の取り組みについて伺いました。

## 産業医と高年齢労働

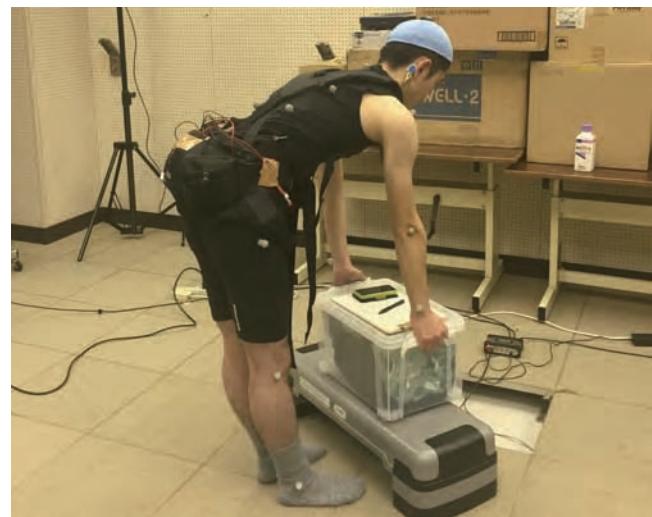
平均寿命が80歳を超え、国民の4人に1人が65歳以上の超高齢社会である日本の現状では、社会を維持するために出来るだけ長く働くことが求められています(70歳現役という言葉も耳にします)。年金などの経済的な問題だけではなく、健康寿命の延伸にも働くことは重要であると考えられています(WHOは高齢者の社会参加が健全な高齢社会を実現すると提唱しています:Active Aging)。年を取っても働ける場を提供する際に重要なことは、加齢による心身への影響をどのように理解し、対応していくかと

いう事です。人も機械と同様、ムリをさせれば壊れます。但し、何がムリなのかは個人差があり、個人差の拡大が加齢現象の大きな特徴であると言えます。それまでの生活習慣や健康状態に影響を大きく受ける「ムリ」の個人レベルを正しく把握し、どのように個人の作業負荷をコントロールするのかを考えることこそが「健康のプロ」である産業医に求められることだと私は考えています。

産業医とは、事業場において労働者の健康管理等について、専門的な立場から指導・助言を行う医師。労働安全衛生法により、常時50人以上の労働者を使用する事業場では1人以上選任することが義務付けられている。健康診断および面接指導、作業管理、作業環境管理、健康・衛生教育、健康相談の実施などを行う。

## 軽労化とは 「ちょうど良い作業」の実現

私の現在の研究テーマは「ちょうど良い作業負荷」をどう実現するか?と言うことです。本研究会のテーマである「軽労化」は、私にとっては「ちょうど良い作業」の実現であると考えています。何がちょうど良いのか?については、例えば「毎日の労働生活を続けられる程度の疲労」、「機能障害を起こさず機能維持できる身体負荷」を与えてくれることであり、この様な働き方が経済的に成立するならば、年を取っても働



くことができます。私が専門とする人間工学の領域では、職場環境の改善によりこの様な状況を実現することを目指していますが、高齢者の労働においては人の機能面へのサポート(アシストツールなど)も重要です。現在、この「ちょうど良い」を実現するために、動作計測による疲労推定法と身体負荷のコントロール(アシストツールの活用)に関する研究を行っております。(写真)

「軽労化」および「スマートスーツ」は株式会社スマートサポートの登録商標です